Chukyo University Public Relations Magazine
SHINKENMI 2020 May

真剣味

196



2019安城七夕親善大使
学長賞受賞
国際英語学部4年
藤田美咲さん

歴史の学びと スポーツ文化財の未来に向けて
スポーツミュージアム開館

オリンピック経験者に聞く／学生インタビュー

［学長賞受賞］

公認会計士試験に現役合格 経営学部・石松知幸さん、篠田浩太郎さん

「ペアで紹介する日本文化英語プレゼンコンテスト」で2位 国際英語学部・藤田美咲さん、谷本真里奈さん

JICAボランティアに参加 柔道部、ソフトボール部女子

※掲載した学生の学年等は、取材当時のものです。

春学期授業をオンライン「MaNaBo」で実施
新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて

新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、大学にも影響が出ている。
中京大学は、４月から始まる予定だった新入生ガイダンスなど各種イベントを中止し、
春学期の授業は遠隔授業支援システム「MaNaBo」を使用したオンライン講義に変更することを決めた。
学生の安全を確保することを一番に考えて対面型授業を回避したうえで、
学修時間を確保するために遠隔授業や課題での学びを通じ、確実な成績評価に結び付けていく。

安村仁志学長メッセージ

新型コロナウイルス感染症が全世界で猛威を振るい、急速に感染者が増えています。不安が広がるとともに、経済活動にも大きな影響が出ており、政府は4月9日、愛知県も10日に《緊急事態宣言》を発出しました。

本学は2月に対策本部（本部長：学長）を設置してさまざまな対策を検討し、感染防止に努めました。そのうえで新学期をいつからどのように始めるか模索しました。①感染者が出ないようにする、②国で定められている教育課程基準（1学期 15回）を確保する、③人を大事にして教育することをモットーとする大学として、最大限の感染防止策を講じながら可能な限り《対面型授業》を維持する、の3点を前提にしました。 その結果、授業開始日を5月7日に延期し、11回の対面型授業を確保し、残る4回の授業についてはオンライン（遠隔型）授業や補講で行う方針を立てました。しかし、《緊急事態宣言》が出るに至り、学内での濃厚接触・通学時の感染リスクを避けるため、春学期の授業は原則オンライン授業で行うことにいたしました。学生・教職員の安全を最優先した選択です。

これに伴い、授業展開の面で大きなチャレンジを受けることになりました。教員は遠隔授業に合わせて、準備した授業計画（シラバス）を変更したり、授業内容をいかに示し・的確な課題を出して反応を求め・確実な成績評価に結び付けていくか、対応しなければなりません。本学には≪MaNaBo≫という遠隔授業支援システムがありますので、その有効活用に努めます。新たな可能性を求めながら、教育の質が保たれるようにしていく以外ありません。

ネットの活用が普及していますが、便利でも、人と人が顔を合わせて学ぶことの意味が損なわれるのではないかとの懸念もあり、何とか対面型授業を維持しようとしましたが、何よりも人命が大事との思いで今回の決断をいたしました。早く終息し、本来のにぎやかなキャンパス・活発な授業風景が戻ることを望んでいます。

人類はこれまで何度も感染症に見舞われてきました。なかでもペストは世界を恐怖に陥れました。14世紀の流行は東洋からイスラム世界を通じてヨーロッパにいたり、当時の人口の3分の1から半数がなくなったと言います。20世紀初めのスペイン風邪では死者が5～6000万人に及び、21世紀も新型インフルエンザ、コロナウイルスのSARS、MARSを経験しました。今回も乗り越えなければならない大きな《試練》です。

試練は、《試され》、《練られる》ことです。個々の人間も社会もどのように立ち向かうか、その力が《試され》ます。蓄積されてきた知識・経験が総動員され、人間の生き方・倫理も問われます。苦慮し、乗り切ろうと最新の学問成果を駆使し、知恵を絞ることで《練られ》ていきます。

オンライン（遠隔）授業に取り組むことにおいても、新たに様々な方法を《試す》ことが期待されます。教員―学生が、ともに作り上げていく要素が強まる可能性もあります。学びというものを新たな視点でとらえ直し、新たな実を手にしていくこともあるでしょう。今こそ力の出しどころです。機器を使いますので、経済状態が厳しいなか困難をかかえる学生たちに対し、大学として資金面での支援、特別奨学金の創設などを準備します。

人間は《食べ》なければなりません。《食べる》ということでは、まず食を得るため働かねばならず、それを維持するための経済活動も大事です。しかし、それはいのちあってのものです。いのちを大事に考え、行動してまいりたいと思います。教育は、《ひとを育てる》が根本です。本学は、建学の精神の4大綱《ルールを守る・ベストを尽くす・チームワークをつくる・相手に敬意をもつ》の意味を改めて自覚し、教育目標《自ら考え 行動できる しなやかな知識人の育成》を堅持しながら大学を挙げて乗り切っていきたいと存じます。





新型コロナウイルス感染拡大の影響で卒業式、入学式を中止
動画でメッセージ配信

新型コロナウイルスの感染者数が増加の一途をたどり、愛知県内でも多数の感染者が確認されたことから、
予定していた 2019 年度卒業式、2020 年度入学式の挙行を中止とした。
式典に代わり、2019 年度の卒業生、修了生に向けた「2019 年度（令和元年度）Web 卒業式」を 3 月 20 日、
2020 年度の新入生に向けた「大学からのご挨拶」を 4 月 1 日に YouTube の中京大学公式チャンネルから動画配信を行った。
2019 年度の学部卒業生 3,083 人、大学院修了生 55 人で合計 3,138 人、
2020 年度新入生は学部生 2,891 人、大学院生 80 人の合計 2,971 人が新たな一歩を踏み出した。



安村仁志学長



梅村清英総長・理事長

2019年度(令和元年度)Web卒業式

安村仁志学長式辞

総合大学の強み、それは異なる学問分野を擁する多様性のある学びの場であるということです。自分とは異なることを学んでいる者たちとさまざまな機会を通して出会う環境にあることです。学部教育を通しての専門知、全学共通教育を通しての教養知を身につけています。何でも乗り越えていける力を備えています。自信と誇りをもって踏み出してください。

梅村清英総長・理事長祝辞

本学は「自ら考え、行動することのできる、しなやかな知識人の育成」を教育目標にしています。「しなやか」とは、何事にもくじけない、柔軟で強い、という意味です。皆さんはすでに、そうした資質を備えています。梅村学園の校訓「真剣味」、建学の精神「学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ」には、チャレンジ精神を奨励する意味も含まれています。志を高く、何事にも挑戦する気概を持って、社会生活に臨んでください。



新聞広告

新入生へ 大学からの挨拶

安村仁志学長挨拶（英語でなされました）

大学生活はさまざまな可能性に満ちています。ただし、それはあくまでも可能性であって、手を広げて待っているだけでも、口を開いて待っているだけでもダメです。期待して、自ら掴み取るものです。皆さんはよく考え、勇気をもって、何に、いつ、どのようにチャレンジするかを決めていくのです。それが、今盛んに求められる《自主性》《自立性》に通じるのです。「私の大学時代」を創り上げていってください。

梅村清英総長・理事長祝辞

皆さんは全国各地から集いました。育った地域の生活や環境はさまざまです。それぞれの興味や関心も違うでしょう。中京大学は多様性に富んだ学びの場です。色々な仲間と出会い、勉学や部活動などを通じて学び合い、刺激し合い、自分を磨いてください。そして個性を伸ばしてください。中京大学が開学して以来、卒業生は13万人を超え、全国各地のあらゆる分野で活躍しています。海外で活躍している卒業生も多くいます。皆さんが社会に出て、困ったときなど必ずや助けになってくれるはずです。

YouTube 中京大学公式チャンネルはこちら
https://www.youtube.com/user/ChukyoUniversityCh/featured



施設外観





上／副館長 來田享子教授（スポーツ科学部）　下／伊東佳那子学芸員

CHUKYO UNIVERSITY SPORTS MUSEUM

中京大学スポーツミュージアム

■構想から約40年間かけて

1984年に木村吉次現館長（スポーツ科学部名誉教授）が「スポーツ博物館」の構想を打ち立て、故勝亦紘一名誉教授とともに貴重資料の収集に着手した。卒業生などに声をかけ、また歴史研究などの資料も購入し、約40年間かけて約3万点の資料を蓄積、保管した。



中京大学スポーツミュージアム　木村 吉次 館長

2015年から、「梅村学園・中京大学スポーツ将来構想会議」が設置され、スポーツのデジタルアーカイブなどを「どのようなコンセプトで、何を伝える場所にするのか」などの検討が始まった。その後、約4年の年月を費やし、昨年10月に中京大学スポーツミュージアムが開館、現在の展示に至った。「中京大学スポーツミュージアム」の最大の特徴は『スポーツと社会の繋がり』『スポーツとその時代を生きた人々』などをコンセプトにしている点である。↘

■展示・学習・体験

展示スペースは「スポーツ映像ウォール」「真剣味の殿堂」「時代とスポーツのスラローム」「スポーツ・デジタルアーカイブズ」「知の饗宴としてのスポーツ」と大きく5つに分かれている。

「スポーツ映像ウォール」ではミュージアムのコンセプトやスポーツの多様な価値を伝えるなど、3本のデジタル画像が映し出され、「真剣味の殿堂」は大学出身のオリンピアン・パラリンピアン92人の活躍と中京大学の歴史を紹介。「時代とスポーツのスラローム」には、「文化・人間・都市と環境・政治・経済・科学技術」の6つのテーマから、近代オリンピックの父と言われるクーベルタンの掲げた理想やオリンピックの歩み、社会が抱える問題などの展示物が並ぶ。「スポーツ・デジタルアーカイブズ」「知の饗宴としてのスポーツ」では、デジタル化した所蔵品や映像資料が閲覧できる。

■地域とスポーツミュージアムの結びつき

【行政との結びつき】

豊田市役所からの依頼に応え、同市役所の一画でオリンピック関連の出張展示を行った。同市民が保管していた64年東京五輪の聖火リレーのトーチ、五輪マークがついた紙風船、えんぴつ、レコードなども展示された。また近隣地域からも市民講座などの依頼があり、伊東佳那子学芸員が金メダルをアクリルケースに入れて持参し、メダルの解説やデザインの歴史などを紹介した。

【地域住民が足を運ぶミュージアム】

来館者は開館3か月で2000人を超した。特別講演もいくつか開催され、11月27日に実施された「中京大学子どもスポーツフェスタ特別開館」では、↖

文化財の未来に向けて









上／真剣味の殿堂　中／時代とスポーツのスラローム　下／スポーツ・デジタルアーカイブズ

子どもたちが「みんなでつくろう！オリンピズムの木」のイベントを楽しんだ。

平日も勉強を兼ねてのグループや市民の方々が平均10組以上来館し、土日の開館時には若い親子連れが自由研究などを目的に訪れる。来館者からは「普通の博物館とは違うと感じる」「ナチス・ドイツや満州国の展示物、（日本が参加ボイコットした）モスクワ五輪の金メダルもあって、オリンピックと歴史の結びつきがわかりました」などの感想も上がっている。

スポーツ科学部・來田享子教授は「研究者たちは、オリンピックの全てを好評価せず、良い面も悪い面も学術的、客観的に評価しています。展示品には、時代背景や歴史的出来事などを盛り込んだ紹介文をつけ、戦争による五輪返上や招致反対運動などの展示もあります」と話す。

■研究拠点として、教育・研究に活かせるミュージアム

スポーツミュージアムは、スポーツ・デジタルアーカイブ化に向けて、さまざまな課題を追求し、スポーツと社会の未来に向けた研究活動などを実施している。

【スポーツ文化財のデジタルアーカイブ化】

メダルや文書資料、音声データなどの貴重なスポーツ文化財をデジタル化することで、データベース上で閲覧が可能となる。また、時代が進み資料が劣化したとしても、保存したデジタル資料を元に研究を進めることができる。このようにデジタル化とスポーツ文化財の可能性を追求している。

【デジタル・アーカイブズの利活用】

遠方で来館が難しい場合でもアーカイブ閲覧などで学びの材料とし、またスポーツ振興の発展やトレーニングデータ↘の公開など「活用できる素材」として有効活用するための方法を研究している。

【スポーツ・デジタルアーカイブズの持続可能性の追求】

個人所蔵のスポーツ文化財が、孫、ひ孫の代へと時代が進めば、大切な資料が散逸する可能性も大きい。それを「いつのオリンピック、だれのもの、どのような資料」を目録化し、散逸防止の解決策を追求。また秩父宮スポーツ博物館など他館で所蔵しているスポーツ文化財をデータベースで一本化し、共有するためのネットワークの構築を策定している。

スポーツ庁が「スポーツ・デジタルアーカイブの利活用に関する調査研究会議」の設置を2017年に決定し、スポーツ文化財などをデジタル化し有効利用する動きが始まった。來田教授は「スポーツ資料の『収集・保存・管理』は、スポーツ文化財を守ることで、ひいては『日本のスポーツ文化全体』を守ることに繋がります。中京大学スポーツミュージアムを、その構想のモデル拠点にしていきたいです」と熱く語った。



知の饗宴としてのスポーツに掲示されている金栗四三さんの書

歴史の学びとスポーツ



INTERVIEW #1

SHIGEHIRO TAKAHASHI

競泳競技

髙橋繁浩 スポーツ科学部教授 水泳部監督

1984年 ロサンゼルス五輪 種目 平泳ぎ100/200m
1988年 ソウル五輪 種目 平泳ぎ200m

戦うのは自分、スタート台に立つのは自分、人には頼れない。

水泳を始めたきっかけ

中学校の時、偶然平泳ぎに出会い、誰に教わることもなく始めました。高校1年で全日本チャンピオン、高校2年で世界大会に出場、さらには日本記録や17歳で世界ランキング1位の記録など、たった2年間でミラクルボーイになりました。自分の気持ち・泳ぎ・記録などが、目標とともに成長していく大切な過程で、記録だけが勝手に成長していった感じです。記録的には絶頂期ですが、反動の落とし穴は大変なものでした。↘

幻のモスクワ五輪

大学1年の時にモスクワ五輪の選考会がありました。当時は身体も細くて泳ぎも自己流なので、高いレベルを目指そうと筋トレを行いましたが、増えた筋肉が原因で逆にフォームが崩れてしまいました。焦る気持ちはあっても、何が悪く、どうすればよいのか、全く分からなくなりました。「モスクワに出たら金メダルを取ります」と笑顔で取材にこたえていましたが、寝る時も、食べる時も、休む時も、泳ぐ時も、常に精神的に追い込まれていました。苦しく挫折感を味わって↖

「継続は力なり」

陸上を始めたきっかけ

幼稚園、小学校と足は速い方でした。でも中学校に入るとさらに速くなるためには練習が大切なことが分かってきて、真剣に練習に取り組んだつもりです。しかし、高校では自分の思うように記録が伸びず、指導の先生の顔色をうかがうようなことも多かったですね。それでも高校3年の時に出場したインターハイでは100メートルの決勝に進出しました。ただ、そこで肉離れのため棄権というアクシデントに見舞われました。今でも悔しい思い出です。

大学3年で日本新記録

将来はオリンピックに出たい、日本記録樹立も目指したいと、中京大学に進学しました。そして3年の時に六大学対抗で10秒28の日本新記録を作りました。ただその時は、公式タイムの発表が手間取り、ハラハラしながら待っていました。そういうこともあってか、自分としてはソウル五輪選考会で日本タイ記録（手動計時10秒1）を出した時の方が日本記録の走りの実感があるくらいです。でも10秒28の記録は、電気計時として日本人で初めて10秒3を切って樹立したものです。

夏季五輪と冬季五輪への出場

1988年のソウル五輪には陸上競技部の同級生も参加しました。ともに短距離の選手でライバルでしたが、仲も良く、お互い切磋琢磨したことが五輪出場につながったと思います。私は次のバルセロナ五輪にも出場しました。400メートルリレーでは、スタートダッシュとコーナーの走りが得意だったので第1走者↘をよく任されました。それで世界との差を痛感することも多かったのですが、バルセロナでも第1走者として出場し、日本は6位入賞しました。実に日本チームとして60年ぶりの入賞でした。

ただ、五輪後に足の調子が悪くなり、ここで引退を考えました。「日本で一番になるには日本で一番練習をする」と自分なりに心に決めてトレーニングをしていた影響もあったのかなと思いました。

そんな折、ハンマー投げの室伏広治選手から「長野五輪のボブスレー競技で選手を探していますよ」との情報を聞き、再びチャレンジ精神に火がつきました。公募に合格したのが本番まで10か月というあわただしさでした。この競技は体重が重い方が有利なため、体脂肪2・8％の状態から10か月で20キロ増やしました。体重増をしながらのトレーニングは本当に大変でした。しかしながら長野五輪に出場したことで日本人男子唯一の夏季冬季両五輪出場者になれました。↘

オリンピックを通して学んだこと

確か中学生の時、学級新聞に将来の夢を書く欄があり、「オリンピック出場」と書いたことを覚えています。それが実現できたのはとにかく目標に向かって階段を一歩ずつ昇って行ったからだと思います。まさに「継続は力なり」です。それから簡単に一番にはなれなかったことも結果的には良かったと思います。小学校ではどうしても勝てない友人がいて、いつも背中を見て走りました。大学でも2位に甘んじることが多く、「勝ちたい、優勝したい」と勝利を渇望し続けたのも良かったのかもしれません。（笑）

世界選手権をはじめ国際大会はたくさんありますが、やはりオリンピックには独特の雰囲気があります。特別な輝きがあります。実にいいものですよ。

若い世代に向けて

目標を立てたら何事にも地道に、そして決してあきらめずに挑戦を続けてください。成功したら大いに喜び、失敗だったらまた、チャレンジすれば良いのです。



INTERVIEW #3

SHINJI AOTO

陸上競技

青戸慎司 陸上競技部監督

1988年 ソウル五輪 種目 400mリレー
1992年 バルセロナ五輪 種目 100m/400mリレー
1998年 長野五輪 種目 ボブスレー4人乗り

いた時期です。
その後、日本がモスクワ五輪出場を放棄すると世間のオリンピック熱も静まり、やっと自分を冷静に見つめ直すことができました。ひたすら練習に励んでいる同級生に目を向け、「努力も少なく、調子が悪くても表彰台に乗れた。ある意味、自分は本当に恵まれていたんだ」と気づき、やっと普通の状態に落ち着くことができました。

ロス五輪からソウル五輪

ロサンゼルス五輪（ロス五輪）は、落ち着いて、余裕を持ち、記録を取り戻し、そんな状態で迎えました。ロス五輪終了後、一度引退しています。指導者を目指して大学院で学び、身体の生理的な機能を鍛えて持久力をつける方法などの知識を得ました。やはり勉強も大切です。その頃に水泳ルールなども改正され、周囲からは「今ならいけるぞ！」と声が上がり、私自身も「ひょっとしたら…」とソウル五輪を目指しました。
ソウル五輪は27歳で出場したのですが、当時は最高齢の競泳出場者でした。若い選手たちの中で、年配者の自分が本当に出場してもよいのか不安でしたが、自己記録の更新（日本記録）ができました。しかし、一度引退していますし、3年のブランクは大きいものでした。体力は落ちていましたが、大学院で学んだ知識を活かし、自分の体を100%鍛え上げる練習を行い、また五輪の経験があったからこそ復帰できたと思います。

金メダルを取るためには

アテネ・北京五輪の競泳で金メダルを獲得した北島康介選手に「金メダルを取るための秘訣」を尋ねたことがあります。彼は一言「ブレないことです」と言い切りました。この言葉は胸に響くものがあり、心から納得できました。誰もが「揺らがないように」と思いますが、オリンピックのあの舞台、あの決勝の雰囲気。スタート台に立ち、金メダルを取るための泳ぎを揺るぎない心で実行するのは凄いことなのです。
予選の感触で、あんな風にいってみよう、ちょっとこうしてみよう、と余計な事を考えます。勝ちたいがために、その場で心が揺れてしまうのです。私にはその『ブレない心』がなかったから、金メダルにたどり着けなかったと深く納得しました。

オリンピックを通して学んだこと

オリンピックに限らず、スポーツは正直なものです。きちっとしたものを積み上げていかないと結果には繋がりません。ただし、積み上げたつもりでも、大きな舞台になるほど、その場所に立つだけでプレッシャーが襲いかかります。いい時もあれば悪い時もある。でも結局、戦うのは自分。スタート台に立つのは自分。人には頼れません。
しかし、正直ひとりでは頑張れません。高いレベルになればなるほど、多くの人たちの支えがあってこそ頑張れます。いい時だけでなく、悪い時に支えてくれる人がいます。選手たちも、それを実感していると思います。良い指導者にめぐり会える「ご縁」、トレーナーさんの「ご縁」、家族の「支え」です。

若い世代に向けて

恐れることなく、常にチャレンジしてください。失敗したからこそ得るものもあります。壁の大きさを実感するからこそ、課題に気づきます。だから強くなれます。それが次の成長につながると思います。



INTERVIEW #2
AKINORI NAKAYAMA
体操競技
中山彰規 名誉教授

1968年 メキシコシティ五輪 種目 金/団体総合、つり輪、鉄棒、平行棒
銀/床運動 銅/個人総合
1972年 ミュンヘン五輪 種目 金/団体総合、つり輪
銀/床運動 銅/個人総合

「災い転じて福となす」1964年東京五輪に出場できなかった悔しさが、メキシコ、ミュンヘン五輪の金メダルに繋がる。

体操を始めたきっかけは

前津中学校（名古屋市中区）の体操クラブに入部したのがきっかけです。当時は体育館がなく、グランドで練習していました。本格的に体操を始めたのは中京商業高校（現・中京大中京高校）に入学してからです。講堂で練習していましたが、高校2年の時に中京大学体育学部ができ体育館も建てられたので、高校生の私たちも利用させてもらいました。部活の先生が大変厳しく、苦手な「あん馬」で失敗すると厳しく指導をいただいたことが苦い思い出です。

64年東京五輪

中京大4年の時に、東京五輪の選考会に臨みましたが、「東京五輪でやるぞ！」の気負いもあり、震えるほど緊張していました。落下などの大きな失敗はなかったのですが、着地などで減点対象になる凡ミスが重なり、東京五輪の出場は逃しました。しかし本当に辛かったのは、五輪開幕直前に東京都体育館でテストパイロットとして演技を行ったことです。
本番と同じ場所で、本番と同じ器具を使って審判の前で演技をします。もちろん観客は誰もいません。「なぜ、私がやらなくてはいけないのだ。本番で…演技したかった…」と、言葉を失うほど辛かったです。
その悔しさが原動力となって、次のメキシコ五輪選考会までは「風邪をひかない」「ケガをしない」を徹底していました。最高の状態で4年後のメキシコに持っていく気持ちが本当に強く、予選でも本番でも落ち着いて演技できました。

メキシコ五輪とミュンヘン五輪

メキシコ五輪では「正選手」として出場しました。まず団体総合で優勝でき、心に込み上げるものがありました。つり輪は得意中の得意で「目をつぶってもできる」と豪語できるほど練習していました。つり輪をはじめ、鉄棒・平行棒でも金メダルを獲得できました。
ミュンヘン五輪では体操チームのキャプテンを務めました。団体総合では笠松・塚原・監物選手などそうそうたるメンバーが揃い、「団体金メダルを取らなければ日本には帰れない」という思いで挑みました。チームメンバーがミスをして悪い流れが続き、私が踏ん張らねば、と奮起しました。団長の竹本先生から「よく押さえてくれた」と褒められたのが今でも忘れられません。
メキシコ五輪の開会式は赤と白の衣装が恰好よく、みんなで記念写真を撮って「これがオリンピックだ」と感激していました。ミュンヘン五輪は勝つのが大前提のため、開会式には参加せず練習、練習でした。どちらの五輪も選手同士、和気あいあいと楽しく過ごしたのが良い思い出です。

オリンピックで学んだこと

私の一番の原動力は、東京五輪に出場できなかったことです。「災い転じて福となす」。東京五輪を逃したことが、メキシコ、ミュンヘン五輪での「金6、銀2、銅2」獲得に繋がりました。全ては東京五輪です。

若い世代に向けて

今の若い世代は本当によく練習しますし、コーチの言葉を素直に聞き指導を仰いでいますが、「不屈の精神」が足りない気がします。自分で立って、自分で歩いて、自分で考えてつくり上げ、そして「絶対にオリンピックへ行く」、そういう気持ちが少し薄いかもしれません。
梅村清明先生（初代学長）の言葉に「耐雪梅花香（たいせつばいかこう）」があります。雪の寒さに耐えて、吸収し、努力して、一生懸命基本をやれば、次に梅の花が咲いて、まわりの人に梅の花のよい香りをかぐわすことができる、ひたすら努力に努力をかさねて臨めば、必ずその香りを届けることができる、そのためには、雪の中で耐えるしかない、私の好きな言葉です。頑張ってください。







メダル獲得と研究者、2つの夢を叶えるため初の五輪出場を狙いたい。

女子アマチュアボクシング・ウェルター級の鬼頭茉衣（まい）選手（体育学研究科修士1年）は、東京五輪への出場枠獲得に向け、淡々とトレーニングに励む日々を送っている。「体調もメンタルも万全です。毎日しっかり食べてしっかり寝る。当たり前のことをちゃんとやっていれば怪我もしないし風邪もひきません」と話し、自己管理も徹底している。

鬼頭選手がボクシングを始めたのは大学1年のとき。昔は体も小さく、身長を伸ばしたいという思いで中学・高校はバスケに打ち込んできた。高校卒業後、新たに何かスポーツを始めたいと模索していた矢先に、たまたまTV番組で女子ボクシングを見て「性格的にピッタリ」と即決。そのままボクシングの道に進んだ。

ただ当初所属していたジムでは挫折もあり、ボクシングへの情熱が一度は冷めた時期もあった。その後、恩師である現在のコーチに出会えたことで、新たに東京オリンピックへ出場するという明確な目標を持つことができた。鬼頭選手のスタイルは前へ前へと距離を詰めていくファイタータイプ。「至近距離でのパンチだけでなく、当てるまでの駆け引きや、その過程も面白く、心理戦です。いかに相手をだますか、ちゃんと考えてやれば身につくし、毎日新しい発見があり楽しいです」とボクシングの魅力を笑顔で語る。

鬼頭選手は現在、中京大学大学院で「女子ボクシング」をテーマにした研究にも取り組んでいる。「ボクシングは男性がするイメージが強いですが、なぜ女子がするのか？どういうきっかけで始めたのか？など、女子選手にアンケートを取り、傾向を分析したいと考えています。論文を書くにあたり自分が体験して仮説を立てた上で、今後女子ボクシングを発展させていきたい」と、将来的には研究者になるという夢も持つ。

「自分の力を100％出せれば絶対勝てると思います。五輪ではメダルを取りにいきたい」

メダル獲得と研究者、2つの夢を叶えるため初の五輪出場を目指す。



体育学研究科修士1年

鬼頭茉衣さん

女子アマチュアボクシング・ウェルター級

※2020年2月取材



国際英語学部4年
藤田美咲さん

2019年 安城七夕親善大使として活動

国際英語学部4年の藤田美咲さんは、2019年安城七夕親善大使として1年間活動した。毎年8月に行われる「安城七夕まつり」を盛り上げ、魅力をアピールするなどの広報的な役割を担っており、昨年は5月に行われたオーディションで書類審査を通過した60人のうち、2次審査を経て5人に選ばれた。

「安城七夕まつり」は毎年3日間で100万人以上を集める、街中が会場となる大規模なお祭り。昨年で66回目を迎え、空を埋め尽くす竹飾りや活気あふれる屋台、複数のステージでイベントなどが行われる。藤田さんたち親善大使は、8月まではお祭りに向けて「キャンペーン活動」として協賛企業への表敬訪問や駅、ショッピングモールで七夕まつりのPRグッズの配布を行い、七夕まつりの後は安城市の観光大使として市内のイベントに参加して安城市のPR活動を行った。

名古屋市出身の藤田さんは、アルバイト先の先輩に勧められたことがきっかけで応募した。「安城市や七夕まつりの歴史など知識を深めることは大変でしたが、資料だけでなく現地に足を運ぶことで安城市の良いところをたくさん発見することができました。今では『安城』という言葉を耳にするだけで振り返るほど。第2の故郷になりました」と話す。

親善大使として、「お祭りを盛り上げたい、多くの人に安城の良さを知ってもらいたいという『やる気』は必要不可欠。ただ、自分ひとりでは何もすることができないため、仲間や市役所の方たち、地域の皆さんが支えてくれるからこそ親善大使として活動できるのだということを忘れず、『愛』をもって活動することが大切だと思いました」と振り返った。

また、藤田さんは教育後援会の優秀者表彰の受賞や、学外のプレゼンテーションコンテストで優秀賞を受賞するなど学術面でも精力的に活動している。



将来は「漠然とした大きい夢ですが、世界中の人を幸せにしたい」。

「2年生のときに受けた授業で『幸せ』について考える機会があり、少し考え方を変えれば毎日すごく幸せになれるということを教わりました。『幸せ』に対する考え方を働きながら伝えることができたら嬉しい。仕事で人に貢献したいです」と笑顔で語った。



※2020年4月取材

Chukyo University

PRESIDENT AWARD

各分野で活躍し、著しい成果を上げた学生を表彰する学長賞が選定され、安村仁志学長から受賞者に表彰状や記念トロフィーなどが贈られた。

【学長賞】この賞は2016年度に新設された表彰制度で、学内外で活躍する学生を学長が表彰する。学部の推薦などによって受賞者を決定する。

※2019年度取材

公認会計士試験に現役合格の2人授与

経営学部・石松知幸さん、篠田浩太郎さん



石松知幸さん



篠田浩太郎さん

経営学部4年の石松知幸さんと篠田浩太郎さんが難関試験である公認会計士試験に現役合格したことを称え、3月4日に学長賞が贈られた。

「公認会計士」とは企業の監査・会計を専門とする職種で、国の経済活動の基盤を支える幅広い役割を果たしている。資格試験は、年2回行われる短答式試験（財務会計論・管理会計論・監査論・企業法）と、年1回行われる論文式試験があり、2つの試験に合格する必要がある。国家資格で合格率は10パーセント前後と非常に狭き門だ。

石松さんは3年次の2018年11月に合格。就職した時のために「何か難しい資格を取ろう」と公認会計士を選択し、大学に入学すると専門学校にも通い始めた。1年の6月に日商簿記3、2級に、2年の6月には1級に合格した。

公認会計士の資格取得に向けた勉強は1日5～6時間。試験勉強は、「基本を十分に理解できていれば応用が利くので、暗記よりも、まず基本を理解するように努めて勉強を続けました」と振り返る。

一方、篠田さんは4年次、昨年11月に公認会計士試験（論文式試験）に合格した。公認会計士を目指したきっかけは、中京大学附属中京高校在籍時の高大連携授業で簿記を学び、会計の面白さに触れたから。その後、経営学部に進学し、授業の中で現役会計士の講義を聞いてさらに刺激を受け、本格的に公認会計士を目指した。1年次の10月から勉強を始め、専門学校にも通った。勉強時間は1日8～9時間。試験直前は12～13時間にも及んだ。モチベーションを保つ方法として、「遊ぶときは勉強のことは一切忘れて気分転換し、メリハリをつけていた」という。

1年の頃から一緒に勉強していたという2人。石松さんは「同じ目標に向かって切磋琢磨しあえる仲間（篠田さん）がいなければ合格できなかったと思います」と笑顔で話した。篠田さんは「勉強方法は自分が量、石松さんは質で勝負するタイプ。正反対だったので互いに刺激をもらうことができました」と話す。

あらためて受験を振り返り、「試験日から逆算し、試験日まで期間がある時期は理解を深め、試験直前は暗記をするなど、今どんな勉強をすることが効率的かを考えました」と石松さん。篠田さんは「科目ごとに勉強方法が違うので、バランスよく取り組むように心がけました」と話した。ちなみに、2人は今春から同じ監査法人で働くことになった。

安村学長は「先輩で現役合格された方が増えれば、挑戦してみようと思う後輩も増えることでしょう。監査法人での仕事がこれから忙しくなると思いますが、頑張ってください」と激励した。

国際英語学部3年の藤田美咲さん、谷本真里奈さんが学長賞に選ばれ、2月28日に表彰された。京都外国語大学で昨年12月14日に行われた第13回森田杯・英文毎日杯「ペアで紹介する日本文化英語プレゼンコンテスト：地域から発信する日本文化」で2位を受賞したことが評価された。

コンテストは英語を母国語としない大学生や短大生などを対象に、地域に根ざした日本文化を英語で紹介する大会。1次審査を通過した10組がプレゼンテーションを行った。

藤田さん、谷本さんペアは「第2の甲子園の聖地から」をテーマとして、10分の持ち時間で、甲子園で行われる高校野球大会や愛知県との関わり、日本文化の素晴らしさを見出すことができる、大会特有の「応援団の協調性」について発表。遠征で吹奏楽部が参加できなかった東邦高校の応援を、大阪桐蔭高校の吹奏楽部が行った「友情応援」、また初出場の誉高校の応援を、東邦高校の吹奏楽部が協力して行った「協力の輪」などのエピソードを紹介した。

甲子園をテーマに選んだ理由は、選抜中等学校野球大会（現在の選抜高校野球大会）第1回大会が、JR東海八事球場（現在は閉鎖）で開催されたことや、選抜高校野球大会の愛知県勢の優勝回数が、大阪府と並び多いことであった。

審査基準はプレゼンテーション内容に加え、調査能力、英語の伝達力がポイントで、審査員との英語による質疑応答も審査対象となった。



（左から）安村学長、藤田さん、谷本さん

「ペアで紹介する日本文化英語プレゼンコンテスト」で2位に

国際英語学部・藤田美咲さん、谷本真里奈さん

JICAボランティアに参加した2クラブの活動を評価

柔道部、ソフトボール部女子

JICA（独立行政法人国際協力機構）との連携で中京大学が海外でボランティア活動をする取り組みで、柔道部が南米・アルゼンチン共和国に昨年2月から約1か月間派遣された。その活動に対して昨年12月13日、学長賞が授与された。当日は柔道部を代表して、ボランティアに参加した早川太啓さん（体育学研究科1年）と三宅恵介部長・監督（スポーツ科学部准教授）に表彰状と記念品が贈られた。

アルゼンチンでは日系指導者の指導力向上と、選手の競技力向上を目的に、講義や基本動作の指導を行った。9か所を回り、ナショナルチームに所属する選手を含め、子どもから大人までのべ約1700人を指導した。

続いて12月23日には、ソフトボール部女子が学長賞を受賞した。柔道部と同様にJICAとの連携で行うボランティア活動で、ソフトボール部女子は18年と19年のいずれも2月から3月にかけ各1か月間、アフリカ・ボツワナ共和国に派遣された。表彰式には、昨年ボランティアに参加した佐藤友香選手（スポーツ科学部4年）、山元綾乃選手（工学部4年）、彦坂千咲選手（スポーツ科学部4年）、高瀬沙羅選手（スポーツ科学部3年）、二瓶雄樹部長・監督（スポーツ科学部准教授）のほか、外部指導者の伊藤幸子コーチ（トヨタ自動車）も出席した。



（左から）三宅部長、早川さん、安村学長



（左から）二瓶部長、伊藤コーチ、高瀬さん、彦坂さん、山元さん、佐藤さん、安村学長

NEDOイベントで最終成果を報告
お茶会ロボットのデモを披露

工学部・橋本研究室



「NEDO AI & ROBOT NEXTシンポジウム～人を見守る人工知能、人と協働するロボットの実現に向けて～」（国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）主催）が1月16、17日、新宿・LUMINE 0（ルミネゼロ）で開かれ、国内で研究が進められている次世代の人工知能技術、革新的なロボット中核技術が集まった。

工学部の橋本学研究室はデモ展示ブースに出展し、NEDO人工知能プロジェクトの研究成果である「お茶会ロボット（2・0）」を披露。研究には学生10人も関わっており、イベント当日は学部生1人（4年）、院生4人（修士2年2人、1年2人）が参加した。

橋本研究室は、「次世代人工知能・ロボット中核技術開発／次世代人工知能技術分野」・「人工知能技術適用によるスマート社会の実現」プロジェクトリーダーの産業技術総合研究所人工知能研究センター長の辻井潤一さんの研究プロジェクトのもと、同研究所の岩田健司さんのチームで研究を進めた。5年間の継続事業で今回が最終発表となった。

展示した「お茶会ロボット（2・0）」は人間のように道具を使うAIロボット。スプーンなどの道具には「すくう、混ぜる」のような特定の使い方（機能）がある。ロボットは道具の形に作り込まれた機能を、深層学習を用いて学習し、腕にあるセンサーで自ら認識。その結果をもとに適切なモノの持ち方や動かし方を自動的に算出することで、全自動でお茶をたてることができる。また動作の制限はあるが、人の動き方の軌跡を学習することで自然な動作パターンをロボットで再現した。

17日には個別テーマの報告としてチームリーダーの岩田さんが「認識クラウドエンジンの構築」について成果報告を行い、高度な物体認識を実現するための認識ソフトウェアモジュールの開発やデータベース構築について、また、それらが実証実験として「お茶会ロボット（2・0）」に使用されていると述べた。

橋本教授は、「この5年間の研究プロジェクトでは、秋月秀一助教をはじめ多くの連携研究者や研究室の学生ら、さらに学内関連部署の強力な支援が得られたおかげで、〝機能〟認識やその応用など、世界初の新技術を世の中に送り出すことができました。関係各位の温かいご支援に深く感謝しています。プロジェクトは今回でいったん終了ですが、AIロボットの研究はこれからも継続し、将来的には実際に工場などで使える技術に高めていきたい」と話した。

NEDOプロジェクトについては「今回のイベントのオープニングで渡邊恒文さん（NEDOロボット・AI部プロジェクトマネージャー）が『ばらばらだった研究者がこのプロジェクトで一つになったことにまず意味がある』と話されており、他の研究者の方と関わり、研究を共有することができて、本当にそのとおりだと思いました」と振り返った。

デモンストレーション時には多くの来場者や出展者、マスコミがブースの周りを囲み、NEDOや経済産業省の見学もあった。



ESSOR'S REPORT

「耳コピ支援アプリ」で SXSW派遣決定も開催中止に

工学研究科・久野文菜さん



愛知県学生海外発表事業「サウス・バイ・サウスウエスト（SXSW）派遣最終選定審査会」が昨年10月4日、愛知県庁本庁舎で開催された。工学部濱川研究室に所属する久野文菜さん（工学研究科修士1年）が、自身のプロジェクトについて発表し、派遣学生に選抜されて認定証が授与された。書類審査を通過した5件のうち、2件の派遣が決まった。※新型コロナウイルス感染症の拡大により中止された。

SXSWはアメリカのオースティン市で毎年3月に開催される音楽・映画・最先端技術の大規模総合イベントで、久野さんは今年3月に派遣される予定だった。テーマに合わせて基調講演や見本市、コンテストなどが市内各所で開かれ、なかでも見本市は革新的な最先端技術の発表の場として近年注目を集めている。昨年3月には270以上の展示者が出展。将来有望な学生やスタートアップ企業、また業界のリーダーとなっている企業など幅広い分野の展示者が参加した。

久野さんが行うプロジェクトは「ジャズミュージシャンのための耳コピ支援アプリ『Orphege』の開発」。CDなどに収録されている多重奏曲の、ピアノやサックスなど、その曲を構成している複数楽器をそれぞれ抽出し、耳コピ（聴き取って譜面を起こして演奏すること）を容易にするシステム（アプリ）の開発について紹介した。

愛知県はアメリカ・テキサス州と2016年4月に「友好交流及び相互協力に関する覚書」を締結しており、今回の派遣もこれに基づき実施される予定だった。世界の注目を集める見本市に愛知県の学生チームを派遣し、自らの研究・開発成果を出展することで、よりグローバルな人材へ成長するための機会を提供することを目的としている。



G20に語学ボランティアとして参加

国際英語学部・新宅璃子さん

名古屋観光ホテルで昨年11月22、23日に開催されたG20外務大臣会合で、国際英語学部3年の新宅璃子さんが大学生語学ボランティアとして参加した。

新宅さんはアメリカで交換留学を経験したほか、これまでも「米国独立記念祝祭イベント」（在名古屋米国領事館主催）や「留学フェア」への語学ボランティアに参加。また、スポーツライターとしてコラムを執筆するなど活発に活動している。

G20外務大臣会合では、ヒルトン名古屋内の国際メディアセンターに「愛知・名古屋　魅力発信スペース」が設置された。新宅さんはそのスペースで参加者や海外メディアに向け、愛知県内の産業情報、地酒やお菓子など食に関わる情報などを提供し、愛知県のPR活動を行った。今回の経験を「楽しく取り組め、同じ向上心を持った他大学の学生と出会うこともでき、良い刺激になった」と話す新宅さん。さらに、「アスリートが活躍できる場を拡大し、彼らのキャリアを支援する仕事に携わるのが将来の目標。海外で自分のスキルや語学力も試してみたい」とも語った。



STUDENT & PROF

沖縄県出身の学生がクラウドファンディングで「首里城再建」活動

スポーツ科学部・牧野将大さん、上地日向さん

スポーツ科学部の牧野将大さん（2年）と上地日向さん（1年）が、首里城再建のための寄付金を集めるクラウドファンディングを期間限定（昨年11月1～30日）で立ち上げた。

沖縄県の歴史と文化の象徴である首里城が10月31日、火災によって正殿など約7棟が全焼。沖縄県出身である2人は、自分たちの思い出の地を取り戻したいという想いから活動を始めた。

「首里城が燃えているのをただテレビで見ていることしかできませんでした。再建に少しでも力になれたらと思い、クラウドファンディングを始めました」と牧野さんは話す。自身が将来スポーツトレーナーを目指し、マネージメントや経営などを勉強しているため、これまで学んできたことを活用したいという思いもあったという。

当初、寄付金集めはスムーズにはいかなかった。大手のクラウドファンディング会社5社のほか、ボランティア団体にも問い合わせたがルールが厳しく、立ち上げは難しいと断られた。さまざまなサイトを探した結果、友人や知人、SNSなどのつながりで寄付金を集めることができるアプリ「polca」で活動を始めることにした。

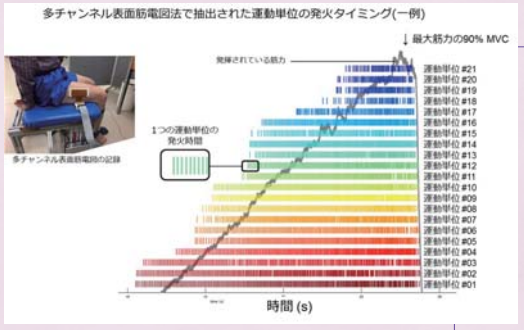
寄付の目標金額は30万円と決めたが、11月半ばで62人の支援者から約11万円が集まった。支援者から届く、「頑張ってください。応援しています」などのメッセージに2人も元気づけられた。

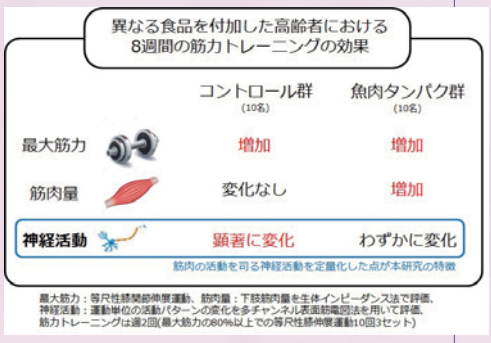
牧野さんは「今までは僕たちも知識がなく傍観者でしたが、大学や学外で学んだことを活かせば行動できることを皆さんに知ってもらいたい。この活動をみて〝大学生もできるんだ。私もやってみよう〟と行動に移してくれる人がいたら嬉しいです」と話した。

一方、首里高校出身の上地さんにとって、首里城は身近な存在で、その焼失は大きなショックだった。「高校時代はクラスのみんなで首里城を見に行ったり、卒業アルバムも首里城公園内で撮影したり、学校の庭のような感覚でした。気軽に行くことができ、思い出の詰まった場所でした」。ショックは大きかったが、「県外にいる私たちに何ができるかと考え、全国の皆さんにこのことを知って欲しくてpolcaでの支援活動を始めました。少しでも大好きな沖縄の役に立てたら」と話す。寄付金は500円から可能で、お礼として、お互いの在住地の観光スポットなどの情報交換ができる掲示板グループに招待した。2人の活動は朝日新聞や沖縄県の地方新聞にも取り上げられた。

最終的には、支援者71人からの寄付があり、支援額は14万3500円に達した。寄付金額はpolca掲載料を差し引いた金額に2人の寄付を加え、13万円となった。







教養教育研究院・国際教養学部の渡邊航平教授をはじめとする研究グループは、高齢者における筋力トレーニングの効果を食品によって調節する試みに成功した。

研究では、高齢者20人を対象とした8週間の筋力トレーニングを実施、参加者の半数には魚肉タンパク（5g）を、もう一方の参加者にはコントロール食としてカゼイン（5g）をそれぞれ毎日摂取してもらい、2週間ごとに最大筋力、筋肉量、神経活動を詳細に評価した。

8週間の筋力トレーニング実施で、最大筋力は両群とも同じように増加したが、筋肉量は魚肉タンパク群でのみ増加。神経活動の変化は、コントロール群で顕著に観察されたものの魚肉タンパク群では顕著な変化は観察されなかった。以上の結果から、筋肉を肥大させるなどの効果を有する食品（本研究では魚肉タンパク）の摂取の有無により、筋力トレーニングの効果（筋肉および神経系の適応機序を選択的に変化させることができる可能性があること）が示された。

研究では、神経活動を評価するため、運動神経の興奮性を多チャンネル表面筋電図法という特殊な方法を用いて記録し解析。この評価方法が、これまでの研究で十分に評価されていなかった「神経系の働き」を明らかにする重要なカギとなった。今後、同じトレーニングでも食品の摂り方によって、筋肉もしくは神経を鍛え分けることが可能になるかもしれない。

この研究成果は2019年10月9日付で Journal of Gerontology Series A: Biological Sciences に先行オンライン掲載された（Journal of Gerontology Series A: Biological Sciences は、老年学の分野で2010年から現在まで世界で最も権威のある雑誌として位置付けられ続けている国際学術雑誌）。

本研究は、中京大学、マリボル大学（スロベニア）、椙山女学園大学、京都大学、日本水産株式会社、京都産業大学との共同研究であり、内閣府・戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）およびSIP協力企業である日本水産株式会社より研究助成を受けて実施された。

高齢者の運動と食事の組み合わせに関する画期的な研究結果を米国学術雑誌で発表

教養教育研究院・国際教養学部の渡邊教授ら研究チーム

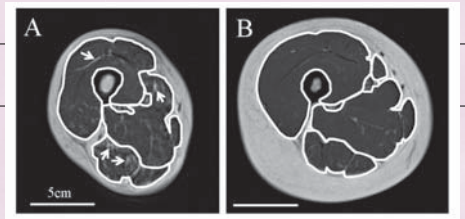


図1 高齢者 (A) と若齢者 (B) の太ももの輪切り画像
高齢者では枠内の脂肪 (矢印で示す部分) が若齢者よりも多いことが確認できる．すなわち高齢者では「筋肉の質の低下」がみられる．
[磁気共鳴画像装置 (MRI) にて撮影 (Yoshiko et al. 2017を改図)]

ESSOR'S REPORT

研究課題が中冨健康科学振興財団の研究助成に採択

教養教育研究院・国際教養学部の吉子彰人助教グループ



教養教育研究院・国際教養学部の吉子彰人助教のグループの研究課題「加齢に伴う拮抗筋の筋力低下に関連する要因の探索」が2月、（公財）中冨健康科学振興財団の研究助成に採択された。これは「国民の健康の維持・増進を図り、活力ある豊かな経済社会の実現に寄与する研究」への助成をコンセプトとしており、研究課題には医学研究が多いため、スポーツ健康科学を専門とする研究者への助成が限られている中での採択となった。今回採択された研究課題は、同研究院・同学部の渡邊航平教授および名古屋大学との共同研究として実施される。

年を重ねた人が「歩く速度が遅くなった」「階段の上り下りがつらい」「椅子からの立ち上がりが難しい」と言うことが多い。これらの原因に挙げられるのが「筋力の低下」だ。加齢による筋力の低下は「ダイナペニア（Dynapenia）」として定義されており、転倒や日常生活機能の低下との関連が指摘されている。

「高齢者の筋力低下」は、「筋肉の質の低下」に、「筋肉量の減少」「神経機能の低下」を加えた三つの要因が、複雑に影響し合いながら起こっていると近年考えられるようになった。

「筋肉の質の低下」とは、「筋肉の中に脂肪・結合組織が増加していること」、すなわち霜降り化してしまった状態を示す。実際、高齢者において、筋肉の質を決める〝筋肉内脂肪率〟は、若齢者の1・2～2・0倍であることが明らかにされている（図1）。これまで吉子助教は、高齢者の筋肉の質に関する研究に意欲的に取り組んでおり、その性質や特徴を解明してきた（Yoshiko et al. Exp Gerontol 2017, Eur J Appl Physiol 2018, Ultrasound Med Biol 2019 など）。

次に「筋肉量の減少」は、いわゆる〝見た目〟でも判断できるように、手足が痩せ、細くなってしまう状態のことをあらわす。また「神経機能の低下」とは、筋肉が動くように送られる指令の数が、高齢者では、若齢者より少なくなってしまうことが分かっている。

しかし、これらの要因を網羅的に検討した研究は少ない。今回の研究課題では、高齢者および若齢者の「筋肉の質」「筋肉量」「神経機能」を太ももの前側の筋肉と後側の筋肉で測定し、筋力低下に影響する原因が太ももの部分で異なるかどうかを検討するという。

「自立した日常生活を送ることは高齢者にとって非常に重要です。そのため、身体動作を担う骨格筋にどのような加齢性変化が起こっているかを明らかにすることは有意義だと考えます。本研究によって、加齢に伴う筋力低下の新たなメカニズムが明らかになるのではないかと期待しています」と吉子助教は研究に対する意気込みを語った。

文部科学大臣表彰・科学技術賞（理解増進部門）を受賞

工学部・長谷川明生教授らの研究グループ

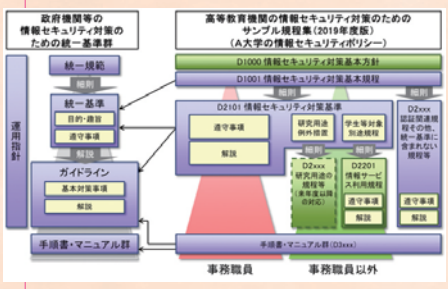
工学部の長谷川明生教授は、文部科学省が4月7日に発表した「令和2年度 科学技術分野の文部科学大臣表彰」で「高等教育機関のための情報セキュリティ規程と教材の普及啓発」の業績により、曽根秀昭・東北大学教授、金谷吉成・東北大学特任准教授、上田浩・法政大学教授、小川賢・神戸学院大学教授らとともに「科学技術賞（理解増進部門）」を受賞した。

科学技術分野の文部科学大臣表彰は、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、国の科学技術の水準の向上に寄与することを目的として行われており、そのうち理解増進部門は「青少年をはじめ広く国民の科学技術に関する関心及び理解の増進等に寄与し、又は地域において科学技術に関する知識の普及啓発等に寄与する活動を行った者が対象」とされている。

長谷川教授らの研究グループは、大学等の高等教育機関が情報セキュリティ対策を検討する際に具体的な参考事例として役立てられるよう、高等教育機関に適した標準的で活用可能な情報セキュリティ規程を策定するとともにセキュリティ教育のための教材を開発し、現在も改良を続けている。

各大学等にサンプル規程集を提供することで情報セキュリティ規程等の策定を支援し、また、教材により大学等の職員や学生に対する情報セキュリティ教育が進むなど、情報セキュリティ水準の維持・向上に寄与している。







マスコミへの発表資料

STUDENT & PROF





豊田市の地域課題の解決策を提言

現代社会学部が内閣府・豊田市と連携

現代社会学部が昨年11月から実施してきた内閣府、豊田市との連携講義の最終発表会が1月10日、豊田キャンパスで行われた。太田稔彦豊田市長、内閣府の萩原英樹参事官など、関係者13人も招いた。

最終発表に向け現地調査を重ねた学生たちは、7グループが提案を発表した。

そのうち、多文化共生をテーマとしたグループは、互いの偏見によって日本人と外国人の分離が進む問題点を挙げ、「県営住宅の空き部屋を利用した子ども食堂」を提案。保見団地に暮らす外国人の小学生を対象とし、学生が授業の一環として運営する案を示した。第3の居場所づくりが、学生と外国人の学びの場、交流、異文化理解に貢献し、団地が住みやすくなると話した。

また、山間地域をテーマとしたグループは、農地保全の担い手不足を問題点に挙げ、「低金利で借り入れできる農業近代化資金制度の対象者拡大」を提案した。

太田市長は「発表を聞き、実現できると思いました。大学生は失敗を怖がらずに自分のやりたいことを積極的に取り組んでほしい」と話した。萩原参事官は「問題は常に現場にあります。良い社会への実現に向けて何ができるのか考え実現してください。今後も大学と行政が連携し、良い社会への実現に取り組めたらと思います」と述べた。

参加した学生からは「豊田市の山間地域は子どもの頃に行って以来でしたが、授業で改めて学べて楽しかった」「法律や市の仕組みを調べるのが大変でしたが、豊田市職員の方から助言をいただき良い経験になりました」などの声があった。

名古屋六大学トップメッセージフォーラム
大阪で各大学の魅力をPR

「名古屋六大学トップメッセージフォーラム」が昨年12月11日、大阪のTKPガーデンシティ大阪梅田で開催され、名古屋大学、名古屋工業大学、名古屋市立大学、南山大学、名城大学、中京大学の6大学が一堂に会した。大学関係者をはじめ大阪や京都、奈良など関西地区の高校の進路担当教員、塾関係者、高校生ら100人を超える聴講者が集まった。

安村仁志学長のあいさつではじまったフォーラムでは、名古屋大学の松尾清一総長、名古屋市立大学の郡健二郎学長、南山大学の鳥巣義文学長、名城大学は吉野彰教授のノーベル化学賞授賞式に出席した小原章裕学長に代わって平松正行副学長、中京大学は安村学長、名古屋工業大学の鵜飼裕之学長らが登壇し、「名古屋六大学トップメッセージ～競争から共創・協創へ　学長が語る教育のあるべき姿～」をテーマに各大学の特徴や取り組みについて述べた。

安村学長は2020年設立の国際学部の話にも触れながら、「『学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ』を建学の精神に、〝学生が主役〟の大学です」とアピールした。

その後パネルディスカッションが行われ、リクルート進学総研所長・リクルートカレッジマネジメント編集長の小林浩さんが司会進行を務め、松尾総長、鵜飼学長、名古屋市立大学・高石鉄雄副学長、鳥巣学長、名城大学・立花貞司理事長、安村学長がパネリストとして参加。名古屋で学ぶ価値や、各大学の産学連携の活動、大学改革について議論を交わした。小林さんは「各大学の特徴、学長の個性も現れていて、関西地区の方に名古屋の魅力も伝わったのでは」と話した。

フォーラム終了後には情報交換会が行われ、高校と大学の教員、保護者と学長、大学関係者同士で活発な意見交換が行われた。





上／登壇したパネリスト　下／中京大学の魅力を学長自らがアピール

第1回梅村学園理事長表彰式
警備員やアイスアリーナの管理会社が表彰される

「第1回学校法人梅村学園理事長表彰式」が昨年11月28日、名古屋キャンパスで行われ、個人表彰で名古屋ビルサービス株式会社の大谷憲昭さん、団体表彰でホーメックス株式会社のアイスマンの方たちが表彰された。

理事長表彰は、教育活動や研究活動で特に顕著な功績があったと認められた人物、また梅村学園、その設置する学校の運営、改革などの推進において顕著な功績があったと認められたときに行われる。大谷さんは「中京大学名古屋キャンパスで警備員として長年勤務され、学生や教職員の安全、安心な大学生活に大きく寄与された」として、設備管理などを行うホーメックス株式会社は「アイスマンの皆様がアイスアリーナの製氷管理に夜遅くまで臨まれ、オリンピックをはじめとする世界大会出場選手の育成に大きく寄与された」として表彰されることになった。



（左から）名古屋ビルサービス株式会社のマネージャー・丸山武晴さん、執行役員・森正晴さん、大谷さん、梅村総長・理事長、野村さん、櫻森さん、ホーメックス株式会社代表取締役・餅原幹也さん

表彰式では梅村清英総長・理事長から個人表彰の大谷さんと、団体表彰でホーメックスの代表として営業本部営業部（当時は所長）の野村雄二さん、事業本部総合サービス事業部総合管理1課の櫻森謙次さんに表彰状と副賞が手渡された。

梅村総長・理事長は「本来であればこのような機会をもっと早く設けたかったのですが、今日の表彰で、日頃感じている感謝を伝えることができて嬉しいです。これからも中京大学、附属高校とともにしっかりと歩み、期待に沿える学園づくりを行っていきますので、今後も変わらず学園に貢献していただけるようお願いします」と祝辞を述べた。

大谷さんは「このような名誉ある素晴らしい賞をいただけると思っていなかったので驚いています。この賞を励みに、これまで以上に目配り、気配りをして警備を頑張りたい」と話した。

また野村さんは「世界のトップ選手が滑る氷の製作は初めてのことも多く、たくさん学ぶことができました。設備管理や植栽管理を通して、学生がこの大学で4年間快適なキャンパスライフを過ごせた、と言ってもらえるように、中京大学をバックアップできるパートナー企業として頑張っていきたいです」と話した。

櫻森さんは「アイスアリーナで学生の育成に役立つように氷を仕上げ、しっかりと滑れる状態にしておくことを引き続きやっていきたい」と意気込みを語った。

表彰式の後には懇談も行われた。大谷さんが50年ほど野球の審判を続けていることから、梅村総長・理事長は「出勤する際はいつも笑顔で出迎えていただき、審判をやられているからか、きびきびとした動きが素晴らしいと思っています」と伝えた。また、「ホーメックスのアイスマンの皆様には、本学のみならず日の丸を背負った有名選手が練習するなかで、精度の高い氷を保ってもらっています。中京大学のリンクの氷が良いと言われており、様々な要素はあるものの、しっかりとした土台を作っていただいています」とあらためて感謝の意を伝えた。



個人表彰

2019年度1級FP技能士試験 現役学生13人が合格
第2回CFP資格審査試験では、現役14人が合格し累計100人を超える

「2019年度1級FP技能士試験」の合格発表が昨年11月6日に行われ、現役学生13人（3年生6人、4年生7人）が合格し、過去最高となった。

合格した学生たちはいずれもCFP6課目に合格していたため、今回は学科試験が免除となり実技試験のみの受験だった。1級FP合格者の累計は62人となった。

また12月17日には「第2回CFP資格審査試験」の発表が行われた。中京大学の6課目合格者は、計15人（現役14人、既卒1人）で、第1回の同試験合格者の7人と合わせると、今年度の合格者は22人となり過去最高の合格者数となった。またCFP資格審査試験の合格者の累計は110人となり100人を超えた。

本来、同試験を学生が受験するケースはまれで、合格者の8割以上が30歳以上の年代で、今回の全合格者のうち20代の割合は15％程度だった。

中京大中京高校野球部
2020年春のセンバツ出場決定も大会中止に



中京大学附属中京高校硬式野球部の第92回選抜高校野球大会（センバツ）出場が1月24日に決まった。同校野球部のセンバツ出場は10年ぶり31回目となる。

2月25日には、同校野球部選手と関係者らが名古屋キャンパスを訪問。梅村清英総長・理事長、安村仁志学長にセンバツ出場を報告した。梅村総長・理事長は「新チームになりましたが、指導してくれる先生方、家族やスタッフのサポートにあらためて感謝して、本番に向けて頑張ってください。応援しています」とエールを送った。

また同日、大村秀章愛知県知事、河村たかし名古屋市長らを表敬訪問し、出場への決意を表明した。訪れたのは印出太一主将、髙橋宏斗選手、髙橋源一郎監督、今村陽一部長と伊藤正男校長。大村知事は「昨年秋の東海地区大会に続き、明治神宮大会も優勝し、中京を目標にしているチームも多い。まずは初戦突破で」と激励した。印出主将は「目指すところは日本一。平成最後のセンバツは東邦高校が優勝したので、愛知県で連覇、そして令和初の1位になれるよう頑張りたい」と決意を述べた。髙橋選手は「愛知県、東海地区の代表として誇りやプライドを持ち、日本一を目指して全力で戦ってきます」と意気込みを語った。

その後、チームは大会開幕を待ちながら、練習に励んだ。しかし、新型コロナウイルスによる感染者が全国規模で広がる中、残念ながら3月11日に大会中止が決定した。







上／記者からの質問に答える髙橋投手　左中／大村知事を訪問−愛知県公館にて　右中／出場決定の報告の後に握手を交わした　下／集合写真

中京大学が「とよたSDGsパートナー」に登録
豊田市及び豊田市内の企業・団体とSDGsに関わる連携を目指す









上／登録式の出席者で記念撮影　左下／太田市長（左）と登録証を持つ中京大職員の川本康博課長

「とよたSDGsパートナー」の登録式が昨年11月27日、とよたエコフルタウン（豊田市）で開催され、豊田市とパートナー登録を結んだ中京大学が出席した。

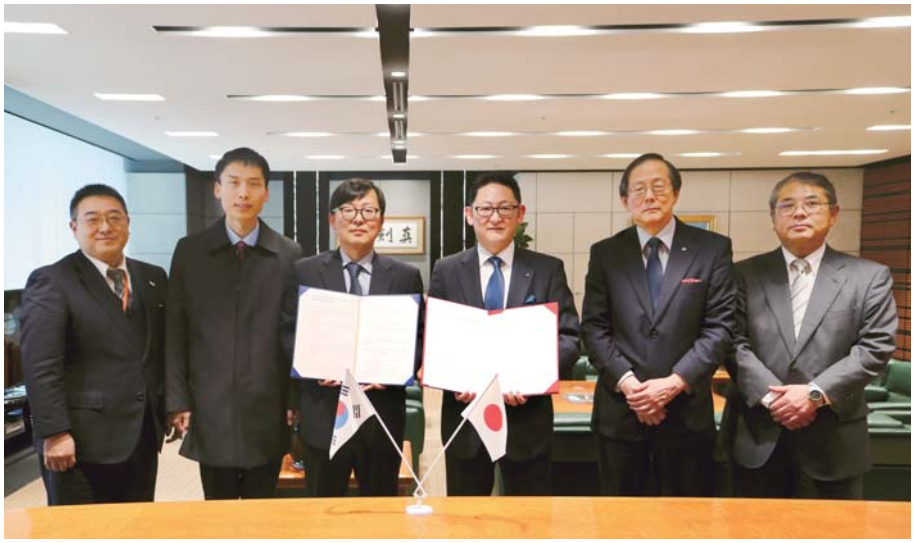
とよたSDGsパートナーとは、SDGs（持続可能な開発目標）の達成、持続可能なまちの実現に向けて同市とともに取り組みなどを行う企業や団体のこと。豊田市内の企業・学術機関など83団体が登録し、登録式には76団体が出席した。同市とSDGsパートナーが、それぞれ持つ資源や知見などを活かし、共通のSDGsゴールや地域課題の解決に向けて連携し、持続可能な取り組みや活動を推進するとともに、SDGsの普及啓発を図ることを目指していく。

中京大学と豊田市は、包括連携協定や豊田市高等教育活性化推進プラットフォームにおいて既に幅広い分野で連携してきたが、今回のパートナー登録をきっかけに、SDGs分野においても、さらに連携を深め、学内のSDGsも推進していく。

太田稔彦豊田市長は「豊田市はSDGs未来都市を宣言しており、市民、市のために様々な施策を行っていかねばなりません。参加企業には今日この機会をきっかけに、もっと輪が広がるような様々な可能性を広げてほしい。面白くしましょう」とあいさつし、登録証が出席団体に手渡された。企業・団体からは、提供品や、すでに行われているSDGsの取り組みが紹介され、とよたSDGsパートナーで今後使用するロゴマークも発表された。

登録式後には交流会、名刺交換会が実施され、SDGsの方向性や連携方法など積極的な交流が行われた。

梅村学園と駐名古屋大韓民国総領事館がグローバル教育に関する協定を更新



中央に朴総領事（左）と梅村総長・理事長

中京大学や中京大学附属中京高校を運営する梅村学園と、駐名古屋大韓民国総領事館は昨年12月13日、グローバルな教育支援を図るための連携・協力に関する協定の更新を行った。

調印式で梅村清英総長・理事長は「韓国総領事館との協定締結は2015年6月にご縁をいただいて、今回2度目の更新で大変嬉しく思います。友好関係を今後も築いていきたい」と語った。

朴先哲総領事は「韓国でも人口や高齢化、外国人労働者など日本と同じような問題を抱えています。日本と韓国の専門家たちが話し合う場を設けるなど、さまざまな機会を考えていきたいと思います。韓国の有望な選手が、スポーツの強さでも知られる中京大学で合宿などをすることもできれば」と話し、学長補佐の佐道明広教授は「教育と研究の交流をさせてもらえるのは大変嬉しいです」と伝えた。安村仁志学長は「10月にはスポーツミュージアムを豊田キャンパスにオープンしています」と紹介、「ぜひお越しください」と呼びかけた。

韓国・地山学園が運営する漢西（ハンソ）高校とは学術連携協定を締結しており、3年前から正規留学生として同高校の卒業生が中京大学に入学している。佐道教授は、「この正規留学生が、漢西高校の生徒が本学を訪問する際に色々手伝ってくれており、先輩として『日本の学校』について教える姿も見られます。こうして高校との交流が大学での交流に繋がり、とても良い関係になっています」と話していた。

2020年4月国際学部開設

中京大学は2020年4月国際学部を開設した。

佐道明広国際学部学部長は「日本には国際という言葉がついた学部が多く存在しますが、その多くは語学教育に偏っています。中京大学国際学部は、単に『英語を話す』だけではなく、『英語で○○を話す』ということを重視しました。また、多様な歴史や文化、思想への理解という深い教養と、複雑化し多様化した課題に対応できる高度な専門性を持った人間こそグローバル化した世界で求められる人財と考え、国際学部はそうした人財を養成するために誕生しました」とコメントしている。

国際学部の学生は、1年次に1セメスターの留学を経験して実践的英語力を習得し、2年次には世界の主要言語（フランス語・ドイツ語・スペイン語・中国語・ロシア語・イタリア語・韓国語）から1つを選択して学ぶ。複数の言語（プルリリンガル）を使いこなす力と、複数の文化（プルリカルチュラル）への理解を深め、さらに人文科学と社会科学に広がる専門的知識・能力を複合的に身につけるカリキュラムとなっている。将来、世界的視野と優れた外国語運用能力を持って、グローバル企業や国際公務員など国内外で活躍できる人財を養成する。

●国際学科
国際人間学専攻　国際政治学専攻
国際経済学専攻　GLS専攻

●言語文化学科
複言語・複文化学専攻　英米学専攻





JICA海外派遣ボランティア
今年もソフトボール部はボツワナ、柔道部はアルゼンチンに

中京大学とJICA（独立行政法人国際協力機構）との3年間の連携事業として行われているソフトボール部、柔道部の海外ボランティア派遣が今年最終年を迎えた。

ソフトボール部の二瓶雄樹部長・監督（スポーツ科学部准教授）とマネージャ、部員18人はアフリカ・ボツワナ共和国で選手の技術指導を行った。巡回したのは5都市。今年は新たにダイアモンド鉱山の町や、プライベートスクールでも指導した。二瓶部長は「最終年はこれまでの経験を活かした総まとめの活動になりました。ソフトボールの楽しさ、面白さとともに、教育としてのスポーツの意味や、日本人の統制の取れた行動を示すことができたと思います」と振り返った。



ボツワナでソフトボールは「国技」として人気が高く、国際大会でも活躍が期待されている。しかし、注目度とは裏腹に技術や戦術の理解浸透に乏しく、コーチ育成制度が確立していないなど課題も多い。二瓶部長は「JICAボランティア活動の一つにSustainability（継続可能性）が挙げられています。これは、この活動がなくなっても、その国の人々で継続して実施していけるようにするということです。今回の活動が継続して行われ、課題を徐々に克服しながら、将来のボツワナのソフトボールの発展につながることを願っています」と述べた。

柔道部の三宅恵介部長・監督（スポーツ科学部准教授）と部員4人は、南米・アルゼンチン共和国で日系指導者の指導力向上と選手の競技力向上を目的に、基本動作や対人的技能を指導した。

配属先の在亜沖縄県人連合会のみならずClub Banco NacióんやClub Itariano、また今回新たにLa Plataの海軍学校でも柔道指導を行い、計10か所、延べ約2400人に指導した。

派遣された4人（男子3人、女子1人）はこれまでで最も多く、階級別、男女別に特化した技術を指導することができたという。一方で、派遣中に初めてスペイン語研修の時間が設けられた。三宅部長は「1日3時間×10回の勉強は、柔道指導に大いに役立てることができました」と話す。

活動を通して「アルゼンチンの柔道技能向上を図るだけでなく、国際分野における人材育成に資することができた活動でした。日本の裏側に住む人たちと双方向で交流できたことは、参加した学生にとっても大変有意義でした。今後はアルゼンチン柔道関係者の日本（中京大学）への受け入れ、ボランティア活動の継続（地方など稽古先の拡大）を視野に入れ、中・長期的にこの活動を継続していきたいです」と語った。



SHINKENMI Vol.196 真剣味
中京大学 | 広報誌 | 2020年5月18日発行
発行／中京大学 広報課
〒466-8666 愛知県名古屋市昭和区八事本町101-2 TEL：052-835-7111（代表）

在学生の皆様へ

中京大学の広報誌やスポーツマガジン等、広報課が発行する広報物は、卒業後は希望された方のみに配送しております。「卒業後も送ってほしい」などのご希望がありましたら、コードを読み取り、登録をお願いいたします。

学園情報・広報誌等お申し込みフォーム
▼

アンケートにご協力ください

より良い広報誌制作のために、アンケートのご協力をお願いいたします。なお、回答していただいたことについては、広報誌改善以外のことには使用しません。

アンケート回答フォーム
▼

挑戦する大学 中京大学 CHUKYO UNIVERSITY